

「三味線」の歴史（一） 豆知識シリーズ その8

箏と並んで日本の代表的な楽器、三味線（正式には三絃（サンゲン） 現在は両方の呼び名があり、三味線が一般的）。しかし、古楽器が網羅され保存されている奈良の正倉院に、主な邦楽器で唯一納められていないのがこの三味線である。つまり意外なことに一番新しく入ってきた「邦楽器」なのである。

楽器の歴史をたどってみると、古代エジプトには、胴に皮を張り、棹に三本の弦を張ったネフェル又はノフルと呼ばれる楽器があった。その後ペルシャ（イラン）にはセタールという楽器が存在している。イラン語で「セ」は「三」「タール」は「弦」という意味であり「三弦」ということになる。

その後、東は中国に渡ったとされているが、13世紀頃、ニシキヘビの皮を張った三弦（サンシエン）と呼ばれる楽器の存在が確認されている。更に14世紀、沖縄(当時の琉球王国)に伝来し、三線（サンシン...現在も沖縄で盛んに行われている）と呼ばれるようになったこの楽器が、大阪の堺港にもたらされたのは永禄年間(1558～70年)の頃である。

最初に手にし、採り入れていったのが琵琶法師だったため、楽器は下記のように変化していく。

項目	琉球の三線	三絃	変化した理由
弾くもの	ピック	撥	奏法が伝わらなかったため琵琶と同じ撥で弾いた（一部はピック・爪弾きのまま残る）
皮	蛇	猫・犬	本土には大きな蛇が生息していないし、輸入ルートもなかったため
胴体	繰り抜き	丸みを帯びた4枚の板枠の張り合せ	正座して弾く為に胴体をひざの上で安定させる必要があり、大ぶりにした
さわり(*)	無い	ある	琵琶の様にさわりをつけた。日本の美意識の象徴。この事で、文字通り日本の楽器となる

(*)糸の振動が木に触れた時に鳴るビーンという雑音で、三絃の命とも言われる音色の事。

琵琶よりも音域が広く棹に柱じゅう（ギターフレットのようなもの）がないので、旋律的にもなめらかであり、声の微妙な変化にも対応できる利点があることから、多種多様な展開をみせ、非常な勢いで民衆に受け入れられていった。その過程で、ジャンルの条件に合わせて、胴の大きさや撥・駒の種類などが変化していく。

現在、胴の大きさから、種類は、太棹・中棹・細棹の3種類に大別される。

種類	ジャンル	変化の理由
太棹	義太夫	浄瑠璃の語り手(太夫)は大袈裟に表現する必要があり、声を大きく低く出すため、伴奏もそれに合わせて大きく低い音程を要求された
	津軽三味線	瞽女(ごぜ)によって発展したが、東北の真冬、門付けをして歩くには音量も大きく荒々しい表現が必要であった
中棹	地唄	音量的に唄う人の声や箏とのバランスをとった
	常磐津・清元	義太夫より唄う要素の多い浄瑠璃なので唄とのバランスが必要だった
細棹	民謡	唄う声とのバランスや、持って練り歩く必要から（津軽民謡のみ上記の様に発達）
	長唄	歌舞伎に取り入れられて役者を引き立てるため、より華やかで鮮やかな軽快なテクニックを要求された
	端唄・小唄・俗曲	お座敷で発展してきたため、音量よりは微妙なニュアンスが求められ爪弾きのまま、小ぶりのままで良かった

この結果、三味線は他の楽器とは異なり、多様な全く別のジャンルの「三味線音楽」を形成していく事になる。 参考資料：『邦楽面白雑学辞典』 文責：狭山市三曲連盟 横山美衣